

葉牡丹

『新壘』
33-2号

冬の季もあまた溢れて咲く花の生命思ひて夜の花舗過ぐ

もの憂く降る雪のなごむ心の我執もあはく肩よりくづるゝ

葉牡丹の巨き葉形の翳にひそみろる醜き罪の赦し難かり

血を頒たねば愛は惨めなまでに緊りゆく献身はつひに省み
られず

立ち並ぶ裸木鋭きまでに冬陽かえすとりとめのなき想い抱
けば

少年

『新壑』
33-3号

血を頒たねば愛は惨めなまでに緊りゆく雪は母と子の距離に降り

探り合えばついに心は触れずして雪に暗き部層に灯ともす

迫り来るごと太りゆく氷柱に氣負いて真向えば深き透明度

夜更けて帰る吾に拘りもなく雪はまがふなき色に降り積む

或時不意に反抗と云ふ刺戟も欲しき少年吾が想の中に育ちつゝ

腹這いて懶惰となりしは妊ごもりし故か犬は常に自由を貪る

冬の河

『新壱』
33-4号

冬の河沈鬱に流れその果の展かれゆくべき未来など想えり

剥がさるゝ如疎くなりゆく血族よ浅き思慮持つ幾人かのた
め

明日の日を恃まらずなりてながき月日ぞ百合は荅のまゝに
華麗ならむ

縫りたきもの求めて歩み入る冬野は還らざる静けさに沈
み

吾を庇ひくるゝ過去などあらざりき風吹く方向に雪たあ
いなく降る

侍みいし空にも疎く背かれぬ冷えてつらぬくばかりの冬の氷
雨

春の果実

『新墾』
33-5号

清掃車に手早く積まし塵芥罪のとり残されたる果実が匂
ふ

不幸を暴^{さら}さぬさまの何時まで続くぎりく迄に追いつめられ
て

頼りゐるものつぎく失ひながら鋭き自らを培ふ日々

平安を喪ひし掌に皮厚く剥く林檎は芳香を放てり

ながく心惹かれるし人に感情及ぶその激しさも今は劬^{こころ}
て

春風の吾をゆさぶりて吹き抜くは或いは不貞を誘ふとも
思ひて

日に日にへだたる夫と淋し合ふ懸念は死と云ふより他なく

海

『新壘』
33-6号

点滅灯緩慢に変わる街中を今までになきゆとりにて歩む

昨日の不安は昨日に置きて今日劬はられながら咲くとき
しらず

貝の殻を手馴れて剥く母の過去より暗きもの負いて日々
あり

春の日はとりとめのなき聯想に暮るゝとも背かれし過去のみ
煌く

海を背景に建つ校舎に今転入の子をいそぐと連れ立ちぬ

容れられざる意見は捨つるべし芥塵ためて流れゆるき河に
陽の没つ

一望の見渡す果に海見えて狭きころのいま展けゆく

自らの声

『新壱』
33-7号

ためらい

人影の疎らとなりしビル街に潜ます靴音は何んの躊躇

希ふことの虚しさ知れど図太く生きよと励ます自らの声

不純なるところ抱き来し日のくれて明日ある如き星の瞬
き

確約のなき明日よ眠れば夢に弾けど鳴らざる楽器つぎ
く並ぶ

さまくに生甲斐を求めその尤も足るゝものを何となすべ
き

開かむとして開ききれぬ芍薬に幾度か換ふる水のぬるみ易
き

少年

『新壘』
33-8号

雨季永く何を培い生くる日にトマトの重みを掌に充たしめ
ぬ

八つ手の葉に暫く翳る陽も初夏の昏さを散らす少年に遅
き反抗期

窓より見る空に限りはあれど吾には訝らかな夏となりつ、

雨後の晩き市場に選みたる胡瓜は織き少年の頬に似む

風に揉む樹々のやさしさに近よれば今のうつゝにやまぬ耳鳴
り

心せく自らに背けばシグナルの青に変わるを静かに待てり

死期

『新墾』
33-9号

もの干さぬ竿に雀の騒がしく夏めかぬ私の貧血しきり

散る花びらが蝶の如く舞ふ錯覚に醒めやすく夏の日を病み
臥す

病み深む夫のまなこを弄びつ、雨季ながら蠅の太りつゝ飛ぶ

まなこ

飛ぶ蠅を瘡せたる眼に追いつめて蠅になりても生きたしと
云ふ

冷麦を夏の真水に晒しつゝ病みたる夫に明日なき夕べ

再びは帰ることなき見納めと今家より担はれゆきぬ

得るとも失ふとも愛は苦しみに似む雲は相寄らぬ形に流
るゝ